私と台湾史研究
東洋史学

私が台湾史を研究するようになったのは、以前、台湾の大学で勤務したことがきっかけです。この国立嘉義大学というかつての勤務校は、台湾中南部の都市嘉義に位置し、日本統治時代に台湾最初の公立実業学校として設立された嘉義農林学校、略して嘉農がその前身です。この嘉農の野球部は 1931 年夏の甲子園大会で準優勝したので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれません。近年、その物語が「KANO 1931 海の向こうの甲子園」として映画化され、ずいぶんヒットしました。このような縁で、私は日本統治時代の嘉義や嘉農の歴史研究に携わるようになったのです。

こう書くとかなりマニアックな研究だと思われるかもしれませんが、いろいろと掘り起こすと面白い歴史が見えてきます。例えば、清代の嘉義の人で原住民ツゥオ族の首狩りの風習を自らの首を犠牲にしてやめさせたという呉鳳の物語が、改編を経ながら、台湾だけでなく、日本、朝鮮の学校でも教えられていたこと。戦時下に台湾の伝統文化を破壊しようとした皇民化運動のさなかにも、台湾の民俗を愛惜し、それらを蒐集・保存しようとした日本人がいたこと。高圧的な統治により台湾人から恐れられていた警官のなかにも、義愛公という神となって、嘉義のお寺に祀られた日本人がいたこと。戦前の台湾で生まれた日本人であるいわゆる「湾生」の人々が、戦後、身一つで台湾から引き揚げ、辛酸を舐めながらも、いまなお嘉義や台湾を故郷として偲んでいること等々です。これまでこういったことを調べながら、台湾と日本とのひと言では言い尽くせない関係について考えてきました。

歴史は往々にして大上段から論じがちですが、ぜひ地に足のついた視点から、人人の顔の見える歴史を想像してみてください。歴史の見え方が変わってくると思います。

土屋洋　准教授

土屋洋『落地生根：日治時期嘉義的學校、民俗及鄉土（地域に根ざす：日本統治時代嘉義の学校、民俗と郷土）』（新北市：稲郷出版社、2021 年）表紙

教会の中の怪物
美学美術史学

ヨーロッパ中世の教会装飾には、意外なことに多数の怪物が登場します。キリスト教の宗教体系から逸脱するように思われる怪物たちが、なぜ信仰の場である教会を飾る美術に組み込まれているのでしょう。十二世紀のシトー会修道院長クレルヴォーのベルナルドゥスは、「修道院において書を読む修道士たちの面前にある、あのような滑稽な怪物や、驚くほど歪められた美、もしくは美しくも歪められたものは何のためなのか」と、その奇妙な魅力を認めつつ存在を批判する言葉を残しています。この言葉とともに教会における怪物をどのように理論化すべきか、これまで多くの研究者が数々の解釈を提示してきましたが、いまだに結論は得られていません。

図版はベルナルドゥスと同時代の修道院の破壊された廻廊を飾っていた柱頭の浮彫で、頭が人間で身体が鳥のハルピュイアというギリシア神話由来の怪物を表します。左の怪物の頭部は剃髪されているため、廻廊の修道士たちは自らの分身を見いだしたかもしれません。右は女性で修道士を誘惑しているようにも見えます。

ところでそもそも怪物はキリスト教の体系から逸脱するのでしょうか。アウグスティヌスは『神の国』で、怪物が人間の限られた理解力にとっては規範から逸脱するようにしか見えないとしても、神の体系全体の中では秩序をそなえ美しいものだと述べています。個々の人間のあいだに見られる小さな差異が神の誤りによるものではないのと同様に、もっと大きな差異も神の意図による創造の一部をなしているというのです。このように怪物には人間の認識能力の狭さとともに、神の創造性の無限の広がりにおける人間の位置づけを示す意義を認めることも可能です。

木俣元一　教授

サン＝ドニ修道院廻廊由来の柱頭（十二世紀中頃　パリ、クリュニー国立中世美術館所蔵）

Studying Fan Fiction
Japan-in-Asia Cultural Studies

Are you a fan of anything? Have you ever thought that your hobby can be studied academically?

I am a student in the Japan-in-Asia Cultural Studies program, and I am currently studying fan fiction. It started as a joke when I thought it would be funny to research K-pop fan fiction, or fictional stories by fans depicting (usually) homoerotic relationships between band members. Turns out, there was more than meets the eye. Fan fiction about real people usually have two modes: one is where you try to keep things as realistic as possible, and the other is where you place the person in a completely fictional setting. In a research paper, I explored how writers of realistic fan fiction try to bridge the gap between the public persona of the idol and their private, "real" identity. At the same time, both writers and readers know that identities are performative, which opens up vast possibilities for their imagination: in the incompleteness of reality, a new "reality" is born. Right now, apart from fan fiction studies, I am curious about fandom and digital media, specifically how the internet has changed the way fans consume and produce new contents, and how social media has become the main space of interaction for fans.

Now, you may think being too personally involved in a topic is bad because it could lead to a loss of objectivity. However, "aca-fans" (academic and fan) like me can utilize theoretical perspectives to analyze our hobbies, while also benefitting from our own experiences and connections in the fan community to aid our research. Our lived experiences today are guided by all sorts of media, and as part of media studies, fandom studies can help us better understand the image-heavy world we live in.

Ngan Tran (3rd-year undergraduate student)

JACS students during an online lesson

月刊
名大文学部
第123号
隔月刊行
編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。